

麻布講評

麻布は例年、工夫して解けば筆算をほぼ使わなくて済むような、思考力を問う良い問題が揃っています。今年は、大幅難化した昨年からは少し落ち着いたものの、本質的な理解を問う良問が例年通り出題されました。

特に、

大問3は場合の数の分野として、

大問6は整数の分野として、

今年の中学入試を代表するような難問です。

大問6は、2のべき乗をテーマにした整数問題で、

下1桁は、4ごとに循環し、

下2桁は、20ごとに循環し、

下3桁は100ごとに循環し、

下N桁は、 $4 \times (5 \text{の}(N-1)\text{乗})$

ごとに循環するという、

数学の美しさを背景とした問題です。

よほど算数数学が好きで好きでたまらないマニアックな子ども以外はこんな知識はないので、その知識が決定的に合否を分けるようなことはないでしょう。

大問3は、場合の数。

場合の数は、突き詰めると、

「どういう基準を持って数えたら、もれなくダブリなく数えられるか」

ということのみが純粹に問われている分野です。

その基準が、限られた試験時間の中では見えづらくはあるものの、無理のない素晴らしい問題でした。

大問2は、一見計算が複雑そうに見えますが、工夫して計算をすると、とても簡単に解けるように絶妙な数値配置がなされている良問です。

麻布側は確実に、「解答」に掲載した解き方を意識して問題を作っているでしょう。

同じ答えを求めるにしても、様々な解き方をして工夫した学習を重ねてきた子が有利になる問題です。

他、大問1はオーソドックスな特殊算、大問4は麻布らしいとにかく試行錯誤を求める問題。

大問5は全く同じ設定の問題を解いた経験がなくても、点の移動範囲を理解している子なら無理なく解ける問題でした。